

## 翻訳

ソルブの民話 (7)<sup>1</sup>

パウル・ネド (編)

大野寿子 (訳)

## 30a 不安や恐怖がどんなものなのかわからない男の話

ある父親には2人の息子がおり、その一方はヤンという名で、不安や恐怖がどんなものなのかということを知らなかった。そこで彼は、できれば経験させていたいただきたいものだと思った。ある晩遅く、彼は教会墓地へとやって来た。そこには自分の名付け親のおじさん<sup>2</sup>も埋葬されていた。ここで彼は、何人かの男たちがボウリング (九柱戯) をしているのを見た。ヤンは彼らに近寄って行き、男たちの中に亡くなった自分の名付け親がいるのを見付けて、自分も一緒に遊ばせてもらえないかと尋ねた。名付け親はこう答えた。

「ダメなわけないだろう。だが、お前が稼いだ金はシャツの内に差し込んで隠しておくんだぞ。そして、12時を越えて留まってはいけない。さもなければお前は破滅してしまうだろう。」

ヤンは、自分の名付け親が自分に言ってくれたように行動し、たくさんかねの金を稼ぎ、それを自分のシャツの内に隠した。時計が12時を打ち始めると、男たちはボウリングをやめて、ピンとボールをひとまとめにしだした。だが、ヤンはまだ続けようとした。すると男たちの1人がヤンにこう言った。

<sup>1</sup> テキスト : Paul Nedo (Pawel Nedo): Sorbische Volksmärchen. Systematische Quellenangabe mit Einführung und Anmerkungen. Budyšin-Bautzen (Domowina Verlag) 1956, S. 151-166. パウル・ネド『ソルブの民話—概説と注釈を施した体系的文献一覧』、ドモヴィナ出版社 (パウツェン)、1956年。151-166頁に掲載された、第30-33番目の話を訳出する。

<sup>2</sup> Pate はキリスト教の父母以外の子どもの洗礼立会人にして身元引受人であり、「名付け親 (のおじさん)」や「代父」と訳せるが、日本ではあまりなじみのない言葉である。

「お前も片づけるのを一緒に手伝いな！」

ヤンはボールを1個とピンを1本持った。ボールは頭蓋骨<sup>しやれこうべ</sup>でピンは脛骨だった。そうこうするうちに時計が12時を打ち終わった。時計が最後の1打ちをしたとき、ヤンはちょうど教会墓地の塀の上によじ登っていた。すると何かが、大きな力で彼の頭の帽子を叩き落とした。

「帽子のためになんか僕は引き返えさない。」

ヤンはこう言って我が道を歩み続けた。家で彼は、自分のシャツの内側から大量の金<sup>かね</sup>をひっぱり出して、自分がそれを獲得したことや、死者たちとボウリングで遊んだことを語った。さらに、自分の名付け親のおじさんもそこにいて、自分が何をすべきか、そしてどのように振舞うべきか教えてくれたと語った。とはいえ、不安や恐怖がどんなものなのか、ヤンにはいまだわからなかった。

\* \* \*

ある日彼は、とある古城へとやって来た。そこにはお化けがいて、我慢できる者など誰もいなかったのだ。その中に一晚中いた者は、次の日には死んでいた。しかしヤンは、不安や恐怖がどんなものなのかどうしても知りたかったので、その古城を所有している伯爵のところへ行き、自分は不安や恐怖がどんなものなのかをどうしても知りたいので、その古城に一晚泊まる許可を自分に与えてくれるよう頼んだ。伯爵は喜んで彼に許可を与え、こう付け加えた。

「これまでそれをやってのけた者は誰もいない。もしそなたがそれをやってのけたなら、そなたを私の森林官として雇い入れよう。」

大きな甕に入れたビールと大きなパイプを1本持って、ヤンはその日の夕方、古城へと赴いた。不安や恐怖がどんなもののかを体験するためだった。そして、次のようなことばを発しながら、ある大きな部屋の中のテーブルに着いた。

「お前のために乾杯しよう、ヤン！」

神の名において、ヤン！

怖がってるかい、ヤン！

何で僕が怖がらなければならいんだい？

僕には誰も何もしていないというのにさ！」

彼はときおり甕から飲み、自分のパイプから煙を勢いよくふかした。ヤンは、5本のロウソクに火を灯していたのだ。彼が座ってそんなに長く経たないうちに、上から人間の手が1本落ちてきて、1本目のロウソクの火を消した。ヤンはテーブルからその手を振り落として、ロウソクに再び火を灯した。

「お前のために乾杯しよう、ヤン！

神の名において、ヤン！

怖がってるかい、ヤン！

何で僕が怖がらなければならいんだい？

僕には誰も何もしていないというのにさ！」

再び手が1本落ちてきて、2本のロウソクの火を消した。ヤンは再びその手を投げ捨てて、ロウソクに火を灯した。

「お前のために乾杯しよう、ヤン！

神の名において、ヤン！

怖がってるかい、ヤン！

何で僕が怖がらなければならいんだい？

僕には誰も何もしていないというのにさ！」

今度は脚が1本落ちてきて、3本のロウソクの火を消した。ヤンはその足を投げ落として、3本のロウソクに再び火を灯した。

「お前のために乾杯しよう、ヤン！

神の名において、ヤン！

怖がってるかい、ヤン！

何で僕が怖がらなければならいんだい？

僕には誰も何もしていないというのにさ！」

再び脚が1本落ちてきて、4本のロウソクの火を消した。ヤンはそれをテーブルから投げ落として、ロウソクに再び火を灯した。

「お前のために乾杯しよう、ヤン！

神の名において、ヤン！

怖がってるかい、ヤン！

何で僕が怖がらなければならいんだい？

僕には誰も何もしていないというのにさ！」

突然1体の屍が落ちてきて、すべてのロウソクの火を消した。ヤンはその屍をテーブルから下ろして、ロウソクに再び火を灯した。そのとき、ダンスのペアが音楽師たちと共に入って来て、部屋の中で踊り始めた。彼はしかしこう言った。

「ヤンは踊らない。ヤンは踊らないだろう。」

それでも一緒に踊りたいという、やむにやまれぬ欲求を持ったが、彼はこう答えるだけだ。

「ヤンは踊れない。ヤンは踊らないだろう。」

とはいえ彼は怖がることはなかった。時計が1時を告げたとき、すべてが静かになった。すると1人の灰色の小人が入って来て、ヤンにこう言った。

「こんなのに耐えられたのは、あなたの前には誰もいませんでしたね！僕といっしょに地下室に来て下さい。そこであなたは、欲しいだけ室を選ぶことができます。怖がることはないのですよ。」

ヤンは怖がることなく付いて行った。地下室の扉の前で、小人は彼にこう言った。

「あなたが地下室から出てきたら、振り返ってはいけません。」

しかし扉の裏には、1匹の大きな黒い犬が寝そべっていた。その灰色の小人はヤンに、こね桶を1つ渡して、「さあお取りなさい」と言った。と

ころが、ヤンが自分からは何も手に取らなかったもので、その灰色の小人はこね桶を金で1杯にして、ただただこう言った。

「これを選び上げなさい。そして戻っていらっしゃい。ただし、振り返ってはならないからね。」

ヤンは振り返りはしなかった。そして、こね桶の中味を地上でぶちまけて、地下室へと再び戻って行った。さて、今度は小人は、彼のこね桶を銀で一杯にした。しかし、ヤンが自分のこね桶を持って地下室を後にしたとき、彼の背後で地下室の扉が、嵐でも起きたかのように勢いよくパタンと閉まった。そして地下室などもう何も見えなくなってしまった。

\* \* \*

朝方早く、森林労務者たちがやって来て、興味深く城の窓の方を見やっていた。彼らはすでに、自分たちがまた1人埋葬しなきゃならないだろうと話していた。そこでヤンは窓を1つ開けて、彼らに向けて、「おはよう、いい朝だね」と大声で告げた。彼らは少なからず驚き、窓辺から覗いているのは彼の幽霊だろうと思った。しかし、ヤンが1人の労働者に合図して自分のところへと招きよせ、次のような言葉を投げかけながら、彼に1ターラー銀貨を投げ付けた。

「お駄賃だ。さあ伯爵のところへ行って、僕は生きていと伝えておくれ！」

すると労働者は喜んで伯爵のところへと走った。こんなにたくさんの金<sup>かね</sup>を、1日で稼げたことなどなかったのだ。

まもなく伯爵が走ってやって来て、ヤンが活着ていることにとても驚いた。伯爵はヤンにこう言った。

「今日からそなたは私の森林官だ。」

それだけでなくヤンは、とにかくたくさんの金を持っていたので、伯爵令嬢を妻に迎えた。ヤンは彼女と共に幸せに暮らしたが、不安や恐怖がどんなものなのかがいまだにわからなかった。だから彼は、不安や恐怖を体験するために世界中を放浪したいという自分の考えを若妻に語った。しか

し彼の若妻は、その旅で夫が命を落としてしまうのではないかと恐れた。彼女は助言を求めた。1人の賢女が彼女に、小さな魚を買い求めて冷たい水に入れるよう助言を与えた。彼女の夫が眠ったとき、魚ごとその水を彼のシャツの内側へと注げというのだ。伯爵令嬢は、与えられた助言通りのことをやった。彼女は小さな魚を買い求め、その魚を冷たい水の中に入れ、彼女の夫が眠ったときに、その水を彼のシャツの内側へと注ぎ込んだ。夫はすぐさま目を覚ましてこう叫んだ。

「おお、とにかく驚いたのなんのって。」

こうしてヤンは、不安や恐怖がどんなものなのかを知ることになった。世の中をさまよう必要などもはやなく、それから長い年月、夫と共に幸福に暮らしたことは、彼の若妻の大きな喜びとなった。

〔出典：『ラウジッツ―娯楽と教訓のための月刊誌』、1882年、67〕<sup>3</sup>

### 30b 恐れを知らない者

昔むかしあるところに強くたくましい若者がいたが、その男は恐怖がどんなものなのかを知らなかった。すると誰かが彼に、どこかに住んでいるある学校の先生のところへ、それを学ぶことができると言った。というのも、ある者がそこで教会の塔の鐘を鳴らしたら、幽霊がたくさん出てきたからだ。そこで彼はその先生を訪ね、その先生は彼を鐘鳴らしに行かせた。1日目の早朝、教会の中で大きな物音がした。緑色の男たち<sup>4</sup>がそこにいて、人の頭<sup>5</sup>でボウリング（九柱戯）をしており、ピンは人の脚<sup>6</sup>だった。時間が過ぎるのも忘れてボールを転がした。それから男たちは去ろうとしたが、

<sup>3</sup> 『ラウジッツ―娯楽と教訓のための月刊誌』、パウツェン（ブディシム）、1882-1937年。Lužiča, časopis za zabavu a poučćenje (Die Lausitz. Monatsschrift für Unterhaltung und Belehrung). Budyšin-Bautzen 1882-1937. (Lzaと略記)

<sup>4</sup> ドイツ語では Kerl.

<sup>5</sup> 肉がついている状態とも頭蓋骨とも、両方解釈可能。

<sup>6</sup> 肉がついている状態とも骨とも、両方解釈可能。

その若者は彼らを行かせなかった。

「僕は自分の全財産を君たちとの賭けで失った。僕は君たちを行かせないからな。」

すると男たちは彼の腕をつかんでこう言った。

「ここにシャベルがある。お前の<sup>かね</sup>金を掘り起こして取り出さな。」

それから彼は掘り起こし、大きな箱いっぱい<sup>きん</sup>の金を取り出した。それを彼が先生のところに運ぶと、先生はこう言った。

「この金を2人で山分けしよう。」

しかし若者は欲しいとは思わなかった。

「僕は恐怖がどんなものかを学んでいないので、何もほしくはないんだ。」

そこでこの先生は金の半分を、この恐れを知らない若者の父親へ送った。

\* \* \*

それから若者は恐怖を「学ぶ」ために、別の地域や別の国へと旅をして、どこに行ったら恐怖を学ぶことができるのかをあらゆるところで尋ねた。すると人々は彼を、ある魔法にかかった城へと行かせた。そこでは誰も耐え忍ぶことなどできなかつたのだ。彼は寝てはならなかつた。彼は灯りを1つもらい、1冊の古い祈祷書を持ち込んだ。4人の黒い男たちが、夜明け間際になって現れこう言った。

「お前はここで何を探さなければならないんだ？」

「あなたたちこそ、ここで何を探さなければならないんだ？僕は、あなたたちよりも早くからここにいたんだ。」

2日目の夜、若者は再びその城へ行った。前日よりも多くの男たちがやって来て、彼を追い払おうとした。しかし彼は有無を言わず、男たちと殴り合いを始め、男たち全員を叩きのめした。というのも、彼が鉄製の墓の十字架を持っていたからだ。3日目の夜、12人の黒い男たちがやって来てこう言った。

「お前はここで何がしたいんだ？」

「僕はあなたたちよりも早くからここにいたし、より多くの権利を持っているんだ。」

男たちは若者と殴り合いを始め、若者が、男たち全員を叩きのめした。

時が経過すると共に、男たちはみな消え失せた。それから煙突の中で、大きなつむじ風が生じた。そこで若者が煙突の方を見やると、半分煙で燻された（半分煙のような）人間を見付けた。その男に彼は飛びかかってこう言った。

「上等だ、お前がここにいるなんて！だが残念、半身だけなんてな！お前のもう半分もここにいたら、僕たちは2人だったのにな。」<sup>7</sup>

しばらくするとまた煙突の中で、大きなつむじ風が起こった。そこで彼が目で追うと、あの男のもう半分を見付けた。彼は半分同士の男たちをくっ付けてこう言った。

「これでいい。これで僕たちは2人ってわけだな。」

それからすぐに、その干からびた煙のような男は動き始め、話し始めた。というのもこの男は、この城で魔法にかけられていたのだ。恐れを知らない男は、このような結果になってうれしかった。彼が魔法にかけられた男を救ったので、城全体も金も元に戻った。彼はここに留まるよう言われたが、その意思はなかった。というのも彼は、まだ恐怖がどんなものなのかを学んでいなかったからだ。

\* \* \*

そうして彼は先へと進み、隣の城へとやって来た。その国の王が、彼を手元に置きたがった。というのも、彼が先のあの城の魔法を解いたからだ。しかし、恐れを知らない男はそれを望まなかった。というのも彼は、まだ恐怖がどんなものかを学んでいなかったからだ。しかし彼らは、若者が祝祭を共に祝う間だけでも、留まってくれるよう頼んだ。<sup>8</sup> その際テーブル

<sup>7</sup> 男が半分存在でしかないの、若者が1人、男が0.5人扱いで、足しても1.5人にしかならないという意味。

の上には、覆い隠された2つの鍵が置かれていた。結婚式のあの風習のように、まだ罌の中に入れられていたのだ。

【ちなみに……この地域の結婚式は2日間続く。最初の日には婚礼が挙行され、その後婚礼の館で祝宴が催される。それから、結婚式を祝う人々はダンスをしに酒場へ行って、一晩中踊り明かし、翌2日目に再び婚礼の館の宴会に行く。人々がダンスから戻ってくると、花嫁の介添え役の少女たち（družka）が、花嫁の左の靴を脱がせて隠す。結婚式を祝う集団の独身男性たちは、花嫁が靴なしでテーブルに着いてしまう前に、その靴を探し出さなければならない。彼らが靴を最終的に探し出し、その靴を花嫁に再び返したら、介添えの少女たちから鍵をもらえる。しかしその際に、2つの鍵がそれぞれ別の物と共に覆い隠されている。覆われた1つにはリングと鍵が、もう1つには生きていた動物やネコ、ウサギのようなものがいっしょに隠されているのだ。若者は、そのどちらにリングが入っているかを当てねばならない。彼らが違う方の覆いを取ったら、彼らの目の前で動物が飛び出し、大きな笑いを引き起こすことになるのだ……。】

そして若者は好奇心いっぱい、その罌の1つを持ち上げ、鍵が鼻先のところに来た。すると1羽のスズメが飛び出し、彼の顔めがけて飛んで来たので、恐怖のあまり鍵を落としてしまった。結局、彼はその国に留まった。というのも恐怖を学んだからだ。

〔出典：『伝説、習俗、慣習にみるヴェント人の民族性』、25〕<sup>9</sup>

<sup>8</sup> ドイツ語の単語は bitten（頼む、願う）の過去形3人称複数の baten が使われているが、ドイツ語原文にカッコ書きで注が施されているので、訳者の解説をまじえ訳出する。baten の箇所は、本来は betteln（物乞いする）の過去形3人称単数の bettelten とすべき箇所である。ヴェント語（ソルブ語の旧名）の原文では、prosyć が使われており、betteln の意味範囲における「より一層懇願する、哀願する」を示す。そのため、bettelten ではなく baten を用いた。

<sup>9</sup> W・フォン・シューレンブルク『伝説、習俗、慣習にみるヴェント人の民族性』、ベルリン、1882年。W. v. Schulenberg: Wendisches Volksthum in Sage, Brauch und Sitte. Berlin 1882. (SchVtと略記)

### 30c 死者の骨（骸骨）

むかしある男がおり、自分の息子に3ペニヒ硬貨を6つ与えた。その息子は、世界中を旅して回るようになった。その若者が旅をしていると、ある教会墓地へと辿り着き、死人の館の中へと入り、そこで眠ろうとした。それから12時になると、死者たちがやって来て、ボウリング（九柱戯）で遊ぼうとした。彼もいっしょに遊んで、有り金全部失った。死者たちが立ち去ろうとすると、彼は泣き出した。自分の財産を賭けで失ったからだ。すると死者たちは彼に金を返し、さらに骨を与えてこう言った。

「これがあれば、お前は世界中を旅してまわることができるし、これがあれば、お前は身を守り、すべてを撃退することができる。」

そうして彼は運を天に任せて先へと進み、どこかあるところで1晩泊まろうとした。すると上の窓のところから1人の男が見下ろしていたので、若者はその男に、1晩泊まらせてもらえないだろうかと尋ねた。男はこう言った。

「泊ってもかまわないが、私のところでは、もうたくさんの方が命を失っているぞ。」

若者はこう言った。

「僕はきっと耐えられますよ。」

1日目の夜、彼のところに2人の男たちがやって来て、若者にあれこれ尋ね、再び去って行った。次の日の夜、昨夜より若干多めの男たちがやって来て、尋ねて再び去って行った。しかし3日目の夜には、部屋がもう人でいっぱいになった。彼らは棺桶を1つ持って来て、それを部屋の中に置き、ふたを開けて、若者をその中に入れようとした。しかし彼はあの骨をつかみ、全員を叩いて部屋から追い出した。早起きをして、彼は再び旅を続けた。

〔出典：『伝説、習俗、慣習にみるヴェント人の民族性』SchVt, 61〕

### 31 ハンスちゃんとハンナちゃん（ヘンスヒェンとハンヒェン）

むかしあるところに父親と母親がおり、2人には大勢の子供たちがいた。そして父親が町へ行き、エンドウマメを4分の1カップ買って来て、子供たちにエンドウマメをそれぞれ1つずつ与えたが、ハンスちゃんとハンナちゃんには与えなかった。2人はそのことでひどく泣いた。父親がこう言った。

「黙るんだ。泣くんじゃない。父さんは森へ木を伐りに行く。お前たちもいっしょに来てベリー（漿果）を探すんだ。」

父親は、アーモンドの木片とアーモンドの棒を1本ずつ手に取り、それらを木に括り付けた。ハンスちゃんとハンナちゃんに彼はこう言った。「さあ行くんだ。そしてベリーを摘んで来るんだ。父さんが木を切っているあいだは、お前たちはベリーを摘んでいいんだぞ。」

しかし風が、アーモンドの木片とアーモンドの棒を絶えずぶつかり合わせたので、2人は父親が木を切っていると思い、ひたすらベリーを摘み続けた。2人はベリーをたらふく食べて、小さな壺もいっぱいにして、父親を探しに行った。2人は、アーモンドの木片とアーモンドの棒がぶら下がっているところへとやって来た。しかし、そこに父親はいなかった。2人はひどく泣いて森の中の歩き回り、大声で叫んだ。しかし誰も見付からなかった。突如として2人は、1軒の小さなコショウ菓子フェッフアーケーヘンホイスヒェンの家(Pfefferkuchenhäuschen)の側へと辿り着き、そこからボロボロと剥がし始めた。

「ボロボロ剥がせ！ヴェラばあさんの小さな家からボロボロ剥がせ！」

そこへ、ヴェラばあさんが急いで出て来た。

「そこにいるのは誰だい？」

すると2人は、ばあさんから見付からないように急いで隠れた。さらに2人は、家から再びボロボロと碎いて剥がした。

「ボロボロ剥がせ！ヴェラばあさんの小さな家からボロボロ剥がせ！」

そこへ、ヴェラばあさんが急いで出て来た。

「そこにいるのは誰だい？」

すると2人は、ばあさんから見付からないように急いで隠れた。さらに2人は、家からどんどんボロボロ砕いて剥がした。

「ボロボロ剥がせ！ヴェラばあさんの小さな家からボロボロ剥がせ！」

そこへ、彼女はとにかく急いで飛び出して来て、2人を素早く捕まえた。ばあさんは2人を家に連れ込んでこう言った。

「さあ、お前たちにしこたま食わせて太らせてやるからね。」

彼女は2人を小さな家畜小屋に閉じ込め、ミルクに浸したゼンメルパン（Semmelmilch）ばかりを食べさせた。それから彼女は、2人が十分太ったかどうか見に行った。

「ハンスちゃん、お前がよーく太ったかどうか、お前の小さな指をこちらへ向けて差し出すんだよ。」

しかしハンスちゃんは、家から持って来ていた小さな笛を外へと差し出した。ばあさんはその笛に切り込みを入れた。

「うーん。お前はまだよーく太ってはいないね。ハンナちゃん、お前がよーく太ったかどうか、お前の指をこちらへ向けて差し出すんだよ。」

ハンナちゃんはしかし、指輪をはめた指を差し出した。ばあさんはさっきのように、その指輪に切り込みを入れた。

「うーん、お前もまだよーく太ってはいないね。」

しかしそれから2人ははしゃぎまわり、ハンスちゃんは自分の笛を、ハンナちゃんは自分の指輪を失くしてしまった。そこにヴェラばあさんが、2人が十分太ったかどうか見るために、再びやって来た。

「ハンスちゃん、お前がよーく太ったかどうか、お前の指をこちらへ向けて差し出すんだよ。」

ハンスちゃんは自分の指を外へと差し出した。ヴェラばあさんはその指に切り込みを入れた。血がすごい勢いで流れた。

「ハンナちゃん、お前がよーく太ったかどうか、お前の指をこちらへ向け

て差し出すんだよ。』

ハンナちゃんは自分の指を外へと差し出した。ヴェラばあさんはその指に切り込みを入れた。血がすごい勢いで流れた。

「うんうん。お前たちはよーく太った。さあ、お前たちをこんがり焼いてやろう。」

ばあさんはパン焼き窯を十分すぎるほど温めて、ハンスちゃんとハンナちゃんをつかんでこう言った。

「さあお前たち、このシャベルの上に座るんだよ。」

2人は、シャベルの上のあっちやこっちに好き勝手に腰かけた。ヴェラはその都度、どうやって座るべきか教えた。しかし2人は何度もシャベルから転げ落ちた。

「どうやって座ったらいいのか、僕たちにはわからない。ちょっとお手本を見せてくれよ。」

そこでヴェラばあさんがすべり戸の上に腰かけると、2人はシュッ！とばあさんを赤々と燃え盛るパン焼き窯の中へと押し込んだ。そうしてヴェラばあさんは完全に焼けてしまい、2人はコショウ菓子の子の家の持ち主となった。もし2人がその家を売却していなければ、今日なおその家を所有し続けているだろう。

〔出典：『高地ラウジッツと低地ラウジッツのソルブ民話』第Ⅱ巻、172頁、10番〕<sup>10</sup>

### 32a 名付けられた子と名付け親のおばさん<sup>11</sup>

むかしあるところに1人の少女がいて、彼女の名付け親のおばさんがと

<sup>10</sup> L・ハウプト/J・E・シュマーラー『高地ラウジッツと低地ラウジッツのソルブ民話』、ベルリン、1953年。転写製版法による1841年と1843の二巻本の復刻。L. Haupt und L. E. Schmalzer: Volkslieder der Sorben in der Ober- und Niederlausitz. Berlin 1953. Anastatischer Neudruck des zweibändigen Werkes a. d. J. 1841 bzw. 1843. (HSchmと略記)

<sup>11</sup> 原文は Patchen und Patin. Patin は Pate の女性形で、「名付け親（のおばさん）」あるいは「代母」と訳すことができる（注2参照）。Pate には古くは Patenkind、つまり「名付けられた子供」、「代子」を示す用法があった。このタイトルの Patchen (Pate+chen)

ても遠い所に住んでいた。この名付け親はいつも、自分を訪ねてくるよう彼女に要求していた。

「私の名付けた子<sup>12</sup>、とにかく私の家をたずねていらっしやい。」

そこである日名付け子は、名付け親の家へと向かった。少し歩いた。すると、4匹のイヌが大鎌を持ってやって来た。もう少し歩いた。すると、4匹のネコが熊手を持ってやって来た。そして女の子は屋敷に着いた。そこにはネズミ（Maus）が刈られた草を持って走っていた。女の子は門を開けた。その門は、1本の人間の左手で止め合わされていた。<sup>13</sup>それから少女は屋敷へ足を踏み入れた。すると、穀物小屋の中に4匹のイヌが脱穀をしていた。それから少女は家畜小屋を覗き込んだ。すると、1匹のネコが雌ウシの乳を搾っていた。そこで女の子は中に入った。そこでは、1本のウマの脚が攪拌してバターを作っていた。それから女の子は地獄の隠れ家を覗き込んだ。そこでは、腸が身をよじっていた。すると、名付け親が入ってきて、すぐさま彼女にこう言った。

「名付け子よ、お前は何を見たの？」

「最初に私は大鎌を持った4匹のイヌを見ました。」

「あのね、私の名付けた子、それは私の家来だったのよ。それからお前は何かを見たの？」

「私は少し歩いて、そこには4匹のネコが熊手を持ってやってきました。」

「あのね、私の名付けた子、それは私の女中だったのよ。それからお前は何かを見たの？」

「私がお屋敷にやって来たとき、刈られた草を持ったネズミが走っていま

---

は、代父+縮小語尾ではなく、代子+縮小語尾と解するのが妥当であり、「小さな代子」あるいは「代子ちゃん」などと訳すべき単語であるが、そうなると日本語にはいっそうなじまなくなるので、「名付けられた子」および「名付け子」とした。

<sup>12</sup> 「私の子よ」と訳すと実の子のようにも読めるので、あえて「私の名付けた子」という語を用いた。

<sup>13</sup> 腕が門として使われている状態のこと。

した。」

「あのね、私の名付けた子、それは私の子供たちだったのよ。それからお前は何を見たの？」

「屋敷の門が1本の人間の左手で止め合わされていました。」

「あのね、私の名付けた子、それは私の門だったのよ。それからお前は何を見たの？」

「私は家畜小屋を見に行きました。そこでは1匹のネコが雌ウシの乳搾りをしていました。」

「あのね、私の名付けた子、それはやっぱり私の下女だったのよ。それからお前は何を見たの？」

「私は中へと入り、そこでは1本のウマの脚が攪拌してバターを作っていました。」

「あのね、私の名付けた子、それは私の夫だったのよ。それからお前は何を見たの？」

「私は地獄の中を覗き込みました。そこでは腸が転げ回っていました。」

「あのね、私の名付けた子、そこにいたのは私の縄だったのよ。」

名付け親のおばさんがそう言い終わったとき、彼女はもう名付け子を殺していた。

〔出典：『ラウジッツ人—娯楽と教訓のための雑誌』、1862年、169〕<sup>14</sup>

### 32b 名付け親になった死神<sup>15</sup>

ある1組の夫婦にはたくさんの子供がいた。彼らにもう1人女の子が生まれたとき、名付け親を誰に頼んだらいいのか、さすがにわからなくなっ

<sup>14</sup> Lužičan, časopis za zabavu a poučjenje [Der Lausitzer. Zeitschrift für Unterhaltung und Belehrung]. Budyšin-Bautzen 1860-1881. 『ラウジッツ人—娯楽と教訓のための雑誌』、パウツェン（ブディシン）、1860-1881年。Lžnと略記。

<sup>15</sup> Tod は「死」を擬人化したアレゴリーのことであり、西洋においては必ずしも「神」ではないが、「死神」という訳語が定着しているので、ここではそれに準ずる。

た。そこで夫は出かけて、主なる神に出会った。神は尋ねた。

「そなたはなぜそんなに悲しんでいるのだ？」

夫は、自分たちは子だくさんで、どこで名付け親を探すべきか、もうわからなくなったと答えた。主なる神は、「私に任せなさい」と言った。

「あなたには任せたくない」と夫は答えた。

「あなたはある人にはすべてを与えるが、他に人には何も与えない。」<sup>16</sup>

それから彼は先へと進み、死神に出会った。死神もまったく同じように尋ねたので、夫はこう答えた。

「あなたは気に入った。なんて言ったってあなたは、自分の手に落ちたすべての者からすべてを奪い去る。老人からも若者からも、金持ちからも貧乏人からも平等にね。」

だから彼は、名付け親<sup>17</sup>になってくれるよう死神にお願いした。死神がやって来て、洗礼式の後こう言った。

「この女の子が少し大きくなったら、私のところへよこしなさい。私がこの子を迎えに来ます。」

女の子は成長し、とてもかわいくなった。今や両親のお気に入りともなり、2人はこの子を人手に渡すなどしたくはなかった。ある日、死神が屋敷の近くまでやって来たので、両親は、死神が娘を連れに来たのだと気付いた。そこで母親がこう言った。

「こね桶の下に入って、はやく隠れなさい。」

女の子はこね桶の下に潜り込み、身を隠した。死神が部屋の中へと入って来て、こう叫んだ。

「私の名付け子はいったいどこなの。」

<sup>16</sup> 金持ちと貧乏人を作り出していて不平等だという意味。

<sup>17</sup> 使用されているドイツ語 Patin に、注が以下の通り添えられている。原注：「ソルブ語で Tod（死神）は、smjeré という女性名詞である。」Pate（代父、男の名付け親）の女性形 Patin は、ふつうは女性の名付け親、すなわち名付け親のおばさん（代母）を指す。つまりこの話の死神は女性なのである。

すると女の子はこう叫んだ。

「名付け親さん。私はこね桶の下ですよ！」

すると名付け親は、女の子を連れて先へと歩んだ。2人はかなり遠くまでやって来て、大鎌を持った大ネズミたち（Ratten）に出会った。名付け親はこう言った。

「この子たちは私の家来ですよ。」

それから2人は少し歩くと、熊手とカッチェージチーズの小切れを持ったネズミたち（Mäuse）に出会った。名付け親はこう言った。

「この子たちは私の女中ですよ。」

そうして2人はどんどん遠くへ進み、屋敷へと辿り着いた。その屋敷の門は、1本の人間の脚で止め合わされていた。それから2人は家の扉のところへやって来た。扉は、1本の人間の手で止め合わされていた。彼女はすべてがさすがに少し怖くなった。それから2人は中へと入り、名付け親は女の子に、ミルクに浸したゼンメルパンを食べさせてこう言った。

「お食べなさい。そして急いでベッドにお入り。私の夫が家に帰ってくる前にね。」

女の子が食べ終わったとき、名付け親は彼女を小部屋のベッドへと連れて行った。その小部屋には小さな窓が1つあった。すると名付け親は、女の子にこう言った。

「さあ、さっさとお眠り！」

しばらくして彼女の夫が帰宅した。

「ここは人間の魂のにおいがするぞ。」

妻はこう答えた。

「静かに。あの子はまだ寝ていないのよ！」

しかし女の子は、名付け親が語ったことを聞いていた。彼女は窓から飛び降り、通りへと走った。そこへちょうど御者が、樽を積んで通りかかった。その御者に女の子は、自分を樽の1つの中に隠してくれるよう頼んだ。

彼は怖がって最初は断った。しかし女の子がひどく懇願すると、御者は女の子の願いを受け入れ、1番下の樽の中に入れてかくまった。

さて、彼は荒地を抜けて遠くへと進んだ。しばらくして、死神の家来たちが走ってやって来て、女の子がいないか御者に尋ねた。御者は、女の子などおらず空の樽だけだと答えた。すると彼は、すべての樽を投げ落とさなければならなくなった。家来たちが樽の中を覗いた。彼らが最後の樽のところにやって来ると、こう言った。

「これまでの樽の中になかったんだから、最後のこの中にもいないね。」

そして家来たちは引き返した。御者は女の子とさらに先へと進んだ。彼が荒野を出る前に、女の子にこう言った。

「さあ、もうこれ以上はお前をかくまえないよ。」

御者は女の子を樽の外へと出させた。女の子はすぐさま、高いマツの木の上へとよじ登った。そこで彼女は大変な恐怖の中で、夜が明けるまで静かにじっとしていた。さて、彼女が震えながらそこに座っていると、大勢の盗賊がやって来て、この木の下に座った。すると、上にいるこの女の子から何度も物が落ちてきて、盗賊たちは怖くなり、そうして彼らはみんな逃げ出した。それから彼らがいなくなって、女の子は下へと降りてきて、盗賊たちがそこに置き去りにした財産をもらって、両親の元へと向かった。彼女は2人に、名付け親のところで自分に何が起こったかを全部話して聞かせた。

〔出典：学術雑誌『ソルブの母』、1892年、169頁、80番〕<sup>18</sup>

### 33 悪魔と鍛冶屋

ラドゥッシュ（Radusch）に1人の鍛冶屋があり、悪魔がその男を迎えに行きたがった。お迎えが来たとき、鍛冶屋はちょうど草刈りをしてい

<sup>18</sup> Časopis Mačicy Serbskeje (Zeitschrift der „Mačica Serbska“ = „Sorbische Mutter“). Budyšin-Bautzen 1848-1937. 学術雑誌『ソルブの母』、パウツェン（ブディシン）、1848-1937年。

て、悪魔にこう言った。

「いっしょに行く暇などないな。君が、私の草を刈り取る手伝いをしてくれないと。」

悪魔は手伝おうと思った。すると鍛冶屋は、悪魔のために大鎌を鍛えて作った。鋤から鋤の刃を取り出し、持ち手は若いハンノキでしつらえた。砥石を差し込むための滑り樽として、鍛冶屋は悪魔に樽を1つ渡した。手前につなげるためである。そして砥石の代わりに、大きなレンガを1つ渡した。それから2人とも草を刈った。草地には、大きなナラの木が1本立っていた。そこで悪魔は鍛冶屋に尋ねた。

「鍛冶屋さん、このタバコはどかさなきゃならないかい？」

「立っているものは全部どいてもらわないと」と鍛冶屋が言った。悪魔は、平手打ちを食らわせて3回打ち、そのナラの木を倒した。それから2人は、すっかりくたびれて家へと帰った。家で、鍛冶屋は服を着ようとした。彼は仕事仲間たちに、自分が服を着るあいだ、鉄の棒を熱しておくように言った。鉄の棒が温まると、鍛冶屋は自分のブーツをベッドの下に投げ入れて、このブーツをベッドの下から取ってくるよう悪魔に言った。悪魔がベッドの下に入ったとき、職人仲間たちが鉄の棒を持って入って来た。赤々とした鉄の棒であまりにも悪魔を突いたため、悪魔は鍛冶屋に、今回はなんとか解放してくれるよう懸命に頼んだ。———月日が流れ、鍛冶屋が亡くなった。彼は天国へと行くことができなかったので、地獄へ行かねばならなかった。彼はそこへ行ってノックをした。すると悪魔が尋ねた。

「そこにいるのは誰だ？」

そこで鍛冶屋が言った。

「ラードウッシュの鍛冶屋だ。」

すると悪魔が手下にこう言った。

「お前たち、鍛冶屋に地獄の門を開けるんじゃないぞ。あいつには二度と会いたくない。」

そこで鍛冶屋は天国へ行って、中を覗かせてくれるよう頼んだが、許可されなかった。それでも鍛冶屋は長いこと頼み込み、ようやくほんの少しだけ開けてもらった。そこで鍛冶屋はエプロンを放り込み、それから自分も中へと入った。

別の話ではこうである。ナラの木が2尋<sup>19</sup>の太さだった。そこで悪魔は、このアザミを切り倒さなければならないかと尋ねた。親方はこう言った。「ああ、お前にできるならな。」

そこで悪魔はいつも通りに一撃を食らわせた。ナラの木はシュパッと消え去った。

〔出典：『シュプレーの森にみるヴェント人の民間伝説と風習』、188〕<sup>20</sup>

## 【パウル・ネドによる注釈】<sup>21</sup>

### 30a 不安や恐怖がどんなものなのかわからない男の話

「怖がることを習いに旅に出た男の話」——KHM4<sup>22</sup>参照——は、ソルブのメルヒェン文学の中で十分に裏付けられており、豊かなモチーフ展開を示している。ヤン・B・ショウタ（Jan B Šolta）により本書 30a として報告されたバージョンは、『ラウジッツ人—娯楽と教訓のための雑誌』<sup>23</sup>〔以下『ラウジッツ』Lžnと略記〕の1861年55号に、すでに断片として登場し

<sup>19</sup> Klafter は、横に広げた腕の長さで、尋とも考えられる。日本で1尋は約1.515メートル。

<sup>20</sup> W・フォン・シューレンブルク『シュプレーの森にみるヴェントの民間伝説と風習』、ライプツィヒ、1880年。W. v. Schulenberg: Wendische Volkssagen und Gebräuche aus dem Spreewald. Leipzig 1880. (SchVsと略記)

<sup>21</sup> テクスト：パウル・ネド『ソルブの民話—概説と注釈を施した体系的文献—一覧』、ドモヴィナ出版社（パウツェン）、1956年、380-382頁。

<sup>22</sup> Brüder Grimm: Kinder- und Hausmärchen. グリム兄弟『子供と家庭のメルヒェン集』の略称。初版第1巻刊行1812年、第2巻刊行1815年。第7版決定版（1857年）には、「メルヒェン」が201話（通し番号KHM1からKHM200まで、1話重複）と、「子どものための聖人伝」が10話（KHM201からKHM210まで）収録されている。【以下、KHMと略記】KHM4はまさに、「怖がることを習いに旅に出た男の話」（Märchen von einem, der auszug, das Fürchten zu lernen）のこと。

<sup>23</sup> 注10参照のこと。

ており（「古城」Stary hród）、イニシャルH・Wの人物によって記された。それに加えてヤン・B・ショウタが、それから数年後の1882年に、本書報告の彫琢された版を出版すべく、『ラウジッツ』Lžn、1876年23号に補遺を提供している（「古城」Stary hród）。特にこの版で目立つのは、常に反復する型通りの言い回しであり、その言い回しでもって主人公は、己が恐れ知らずであることを確認するのである。

30b と30c として提示された W・フォン・シューレンブルク (W. v. Schulenberg) による寄稿は、J・ボルテ／G・ポリーフカ『グリム兄弟《子供と家庭のメルヒェン集》注釈書』<sup>24</sup>第 I 巻34頁にも指摘されている。鉢に入ったスズメを伴った結末は、風習と慣習に根付いたいくつかのソルブの様式である。我々はしたがって、シューレンブルクによる解説としての補足を維持した。

ボルテ／ポリーフカ『注釈書』第 I 巻、22頁、つまり KHM 4 の注釈において、このタイプのための多くの証拠資料が集められている。とりわけ指摘されるのは、ベヒシュタイン『ドイツ伝説集』<sup>25</sup>の122頁で、その話が我々のバージョン 30a と、まさに酷似していることである。シュレージエンのバージョンとして、W-E・ポイケルトの文献<sup>26</sup>にいくつかの資料が存在する。その中には確かに、題材上の類似モチーフは存在するが、怖がることを学ぶ者の決定的なモチーフがすべてにおいて欠けている。たとえば、彼の『シュレージエンの民俗』第 4 巻『シュレージエン地方の

<sup>24</sup> J. Bolte/ G. Polívka: Anmerkungen zu den Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm. 5 Bde. Leipzig 1913-32. J・ボルテ／G・ポリーフカ『グリム兄弟《子供と家庭のメルヒェン集》注釈書』、全 5 巻、ライプツィヒ、1913-32年刊行。（以下、ボルテ／ポリーフカ『注釈書』あるいはBPと略記）

<sup>25</sup> Ludwig Bechstein: Deutsches Sagenbuch. Leipzig 1853. ルートヴィヒ・ベヒシュタイン『ドイツ伝説集』、ライプツィヒ、1853年。

<sup>26</sup> W.-E. Peuckert: Schlesiens detusche Märchen. In: Schlesisches Volkstum. Bd. 4. Breslau 1932. W-E・ポイケルト『シュレージエン地方のドイツ・メルヒェン』（『シュレージエンの民俗』第 4 巻）、ブレスラウ、1932年。

ドイツ・メルヒェン』の111頁62番（呪われた城）や、113頁63番（悪魔が馬汚しを引き白にかける）である。

チェコの諸メルヒェンは——V・ティレ『チェコのメルヒェン集』第Ⅱ巻第1部103番<sup>27</sup>——ふつうは宝の発見で終わり、ここでよく見られたもののように、独特のモチーフを提供する。我々のモチーフのaは、J・ポリーフカ『スロヴァキアの民話集』<sup>28</sup>第Ⅳ巻388頁のスロヴァキアのメルヒェンにも、再び登場している。ポーランドのバージョンは、——クジジャンノフスキー『体系的に配置されたポーランド民話』<sup>29</sup>第Ⅱ巻32頁が53の資料を目録化している——別のメルヒェンタイプと混ざっている。(AT<sup>30</sup>330D、AT815、AT1031)。

### 31 ハンスちゃんとハンナちゃん（ヘンスヒェンとハンヒェン）

「ヘンゼルとグレーテル」（ハンスちゃんとマルガレーテちゃん）のメル

<sup>27</sup> V. Tille: Soupis českých pohádek (Sammlung der tschechischen Märchen);

I. Rozpravy České Akademie Věd a Umění. Tř. III, č. 66. Praha 1929;

II/1. Rozpravy České Akademie Věd a Umění. Tř. III, č. 72. Praha 1934;

II/2. Rozpravy České Akademie Věd a Umění. Tř. III, č. 74. Praha 1937.

V・ティレ『チェコのメルヒェン集』第Ⅰ巻、プラハ、1929年。第Ⅱ巻第1部、プラハ、1934年。第Ⅱ巻第2部、プラハ、1937年。

<sup>28</sup> J. Polívka: Súpis slovenských rozprávok (Sammlung der slowakischen Volksmärchen). 5 Bde. T. Sv. Martin 1923-1931. J・ポリーフカ『スロヴァキアの民話集』全5巻、マルティン、1923-1931年。

<sup>29</sup> J. Krzyżanowski: Polska bajka ludowa w układzie systematycznym (Das polnische Volksmärchen in systematischer Anordnung). 1. Bajka zwierzęca (Das Tiermärchen) Warszawa 1947; 2. Baśń magiczna (Das Zaubermärchen) Warszawa 1947. J・クジジャンノフスキー『体系的に配置されたポーランド民話』、第Ⅰ巻「動物メルヒェン」、ワルシャワ、1947年。第Ⅱ巻「魔法メルヒェン」、ワルシャワ、1947年。

<sup>30</sup> Stith Thompson: The Types of the Folktale. A Classification and Bibliography. Antti Aarne's Verzeichnis der Märchentypen (FFC3) translated and enlarged. FFC184. Second Revision. Helsinki 1961. スティース・トンプソン『民話の話型一分類と目録（アンティ・アールネ『メルヒェンタイプの目録』（FFC3）翻訳増補版）』（FFC184）第2版、ヘルシンキ、1961年。アールネとトンプソンの2人の頭文字をとってATと略記し、話型番号を算用数字で示す。

ヒエンを、J・E・シュマーラー (J. E. Schmalzer) が、「至る所で知られている」と特徴付けている。シュマーラーの版は、以下の資料によって再録されている。ハウプト『ラウジッツの伝説本』<sup>31</sup>第Ⅱ巻215頁、フルニック『チタンカ』<sup>32</sup>3頁2番、エルベン『スラブ読本』<sup>33</sup>76頁、ヨルダン『最も美しいメルヒエン集』<sup>34</sup>66頁、ナウカ『伝説とメルヒエンと物語』<sup>35</sup>18頁15番 (いくらかの補足あり)。

その中の1つのバリエーションを提供するのは、導入部分で KHM15番に倣っている、シュレーンブルク『伝説、習俗、慣習にみるヴェント人の民族性』<sup>36</sup>15番 (ヤンコとマリカ) である。その続きのストーリーでは、凍った川を越えての逃走が行われる。さらに、子供たちがある医者家に行き付きそこで育てられるという、明らかにごく近年、文学的出典に基づき付加されたストーリーが続く。ヤンコは著名な医者となり、自分の継母を重病から救うのである。最終的には、フェッケンシュテット『ヴェントの伝説・メルヒエン・迷信的風習』<sup>37</sup>225頁5番のさらなるバージョン (小さなコショウ菓子の家) を参照されたし。この話では、漁師の3人の子供たちがいて、その漁師は上の子2人を片付けようとする。2人は父親に、昼食

<sup>31</sup> K. Haupt: Sagenbuch der Lausitz. Bd.I und II. Leipzig 1862-1863. K・ハウプト『ラウジッツの伝説本』第Ⅰ巻、第Ⅱ巻、ライプツィヒ、1862-1863年。

<sup>32</sup> M. Hórník: Čitaka (Lesebuch). 1863. M・フルニック『チタンカ (読本)』、1863年

<sup>33</sup> K. J. Erben: Slovanská čítanka. Výbor prostonárodních pohádek a pověstí slovanských v nářečích původních (Slawisches Lesebuch, eine Auswahl von volkstümlichen slawischen Märchen und Sagen im Dialekt). Prag 1863-1865. K・J・エルベン『スラブ読本—スラブ民族の方言によるメルヒエン・伝説セレクション』、プラハ、1863-1865年。

<sup>34</sup> H. Jordan: Najrjeńše ludowe bajki. 1. zešiwk (Die schönsten Volksmärchen. 1. Heft). Wojerecy- Hoyerswerda 1876. H・ヨルダン『最も美しいメルヒエン集』第1号、ヴォイエレツィ (ホイアースヴェルダ)、1876年。

<sup>35</sup> M. Nawka: Baje, baiki a basnički. Serbske narodne. 1. zešiwk (Sagen, Märchen und Erzählungen. Sorbisches Volksgut. 1. Heft). Budyšin-Bautzen 1914. M・ナウカ『伝説とメルヒエンと物語—ソルブ民族の宝』第1号、パウツェン (ブディシン)、1914年。

<sup>36</sup> W. v. Schulenberg: Wendisches Volksthum in Sage, Brauch und Sitte. Berlin 1882. W・フォン・シュレーンブルク『伝説、習俗、慣習にみるヴェント人の民族性』、ベルリン、1880年。

<sup>37</sup> E. Veckenstedt: Wendische Sagen, Märchen und Abergläubische Gebräuche. Graz 1880. E・

を持って行くことになる。森を抜ける道には父親が、エンドウマメを置いて目印を付けている。2人は、魔法の小さなコショウ菓子の家に迷い込む。そこでは1人の女中が2人を助け、魔法は焼き殺される。彼らはいっしょに、見付け出した宝を持ち去る。

ソルブのバリエーションは、KHM15のテキストにおけるいわゆるドイツのメルヒェンとは、些細なところでしか区別されない。たとえば、導入部のモチーフが欠けている。極めて独創的なのは、自然のアーモンドの材木によって木こりの作業音が装われることだ。ボルテ／ポリーフカ『注釈書』第I巻115頁では、フェッケンシュテット『ヴェントの伝説・メルヒェン・迷信的風習』とナウカ『伝説とメルヒェンと物語』所収の話以外のバージョンが記載されている。

ボルテ／ポリーフカ『注釈書』は、このメルヒェンの全ドイツに渡る分布も証明している。我々の近隣諸国における分布は、以下の通りである。シュレージエンからは、魔術的逃走を伴ったポイケルト『シュレージエン地方のドイツ・メルヒェン』115頁64番（コショウ菓子の家）が拳がっている。ブランデンブルクの版としては、エンゲリエン／ラーン『マルク＝ブランデンブルクの民衆のことば』第I巻<sup>38</sup>140頁（悪い継母）が拳がっているが、KHM13「森の中の3人の小人」の諸モチーフと混交している。ブランデンブルクのウッカーマルク（Uckermark）地方由来の版は、クーン／シュヴァルツ『北ドイツの伝説・メルヒェン・慣習』<sup>39</sup>319頁（フリックじいさん）であり、シュレーンブルクによって、『ブランデンブルク州の地域研究』（Landeskunde der Provinz Brandenburg）第III巻266頁に再録さ

---

フェッケンシュテット『ヴェントの伝説・メルヒェン・迷信的風習』、グラーツ、1880年。

<sup>38</sup> A. Engelien und W. Lahn: Der Volksmund in der Mark Brabdeburg. 1. Teil. Berlin 1868. A・エンゲリエン／W・ラーン『マルク＝ブランデンブルクの民衆のことば』、第I巻、ベルリン、1868年。

<sup>39</sup> A. Kuhn und W. Schwartz: Norddeutsche Sagen, Märchen und Gebräuche. Leipzig 1848. A・クーン／W・シュヴァルツ『北ドイツの伝説・メルヒェン・慣習』、ライプツィヒ、

れている。そこでは、小さな妹が魔女の魔法の杖を盗み、自分の兄（弟）を解放する。それから、逃走と魔女による追跡、池の中の雄カモと雌カモへの変身と続く。池の水を飲み干す試みによって、魔女（のお腹）が破裂する。

ティレ『チェコのメルヒェン集』第I巻381頁に収録されているチェコのメルヒェンのいくつかの話は、確かに我々ソルブのモチーフ（と同じもの）を提供してはいるが、全体的には結局、ソルブの版がドイツ・メルヒェンへと帰属することを説明している。同様のことが、このタイプのスロヴァキアのメルヒェン（ポリーフカ『スロヴァキアの民話集』第IV巻188頁所収）にも言える。クジジャンフスキー『体系的に配置されたポーランド民話』第II巻35頁にまとめられたポーランドの諸バージョンは、我々のものとよく似ている。否、クジジャンフスキーは、「ヘンゼルとグレーテル」のドイツ・メルヒェンのポーランド伝承への大きな影響を示唆している。

### 32a 名付けられた子と名付け親のおばさん

M・ルーラ（M. Róla）によって、「民衆より」という追記と共に刊行される。A・チェルヌィ『神話的表象』<sup>40</sup>、学術雑誌『ソルブの母』1892年106頁の注釈において再録されており、ナウカ『伝説とメルヒェンと物語』14頁11番の再録では、わずかな箇所のみ変更されている。特に、語りの反復によって、実に不気味で劇的な緊張感を与える、慣習的な決まり文句（言語）を参照のこと。

---

1848年。

<sup>40</sup> A. Černý: Mythiske bytosće lužiskich Serbow. (Mythische Gestalten der lausitzer Sorben). Časopis Mačicy Serbskeje 1890-1897. Sonderdruck in 2 Bänden 1898. A・チェルヌィ『ラウジッツ地方ソルブの神話的表象』、学術雑誌『ソルブの母』、1890-1897（特別号2巻本、1898年）。

### 32b 名付け親になった死神

A・チェルヌイはこのバージョンを、ボルニッツ (Bornitz) のカータ・ビヤルシュェッツ (Kata Bjaršec) とパウツェン (Bautzen) のH・ハンドリコヴァ (H. Handrikowa) から入手している。チェルヌイは32aのバージョンを、自分の詳細な32bバージョンの残余と見なしている。しかしながらそれと矛盾(対立)しているのは、このbバージョン帰結部が、「粉ひきの娘と盗賊たち」(AT955、KHM40「盗賊の花婿」)話のソルブ・バリエーションの中でも登場し、むしろそれに依拠している一方で、導入部の方とはいうと、「死神の名付け親(代父)」(AT332、本書35番)を想起させる点である。それに関連して、aバージョンに現れているような、我々ソルブのメルヒェンタイプの中核たるものも残っている。我々のメルヒェンには、類話資料はわずかばかりしかない。類縁関係は、KHM42とKHM43との間に存在する。ボルテ／ポリーフカ『注釈書』第I巻375頁と377頁も、それに加えて少しの資料しか提供できていない。訪問のモチーフは、ティレ『チェコのメルヒェン集』第II巻第1部99頁に掲載された、チェコのメルヒェンにも見うけられる。否、全体的にチェコの話は、AT332に属している。スロヴァキアのメルヒェンに関しては、ポリーフカ『スロヴァキアの民話集』第III巻400頁が、2つの資料を提供している。その中の1話目は、紛れもない恐怖メルヒェン (Schreckmärchen) であり、2話目は、我々のモチーフ構成に合致している。ポーランドのメルヒェンに関しては、クジヤノフスキー『体系的に配置されたポーランド民話』第II巻36頁が、4つの資料を示している。ここでは、ときおり親戚とされる人食いの女魔法使いが、1人の孤児を雇う。(4つの中の)1話だけが、我々のaバージョンに合致している。1話には逃避も描写されている。——このタイプのメルヒェンに関しては、G・ヘンセン (G. Henßen) の『ドイツの恐怖メルヒェンとそのヨーロッパの類話』(Deutsche Schreckmärchen und ihre europäischen Abverwandten)を参照のこと。所収『民俗学のための学術雑誌』(Zeitschrift

für Volkskunde)、50号 (1953年)、1/2分冊、84-97頁。

### 33 悪魔と鍛冶屋

悪魔をだまして手玉にとる鍛冶屋のモチーフに関して、我々のオリジナルのソルブ・バージョンと言えばこの話である。ソルブ文学の中に登場する他のテキストは、オリジナルではない。そんなわけで、J・シェウチック (J. Šewčik) 『メルヒェンと説話』<sup>41</sup>の95頁 (靴屋と悪魔) のテキストは、J・ヴェンツィヒ (J. Wenzig) 『西スラブのメルヒェン・コレクション』<sup>42</sup>の173頁のテキストからの逐語的な翻訳である。『ソルブ新聞』<sup>43</sup>1936年掲載の「靴屋と悪魔」(Šewc a čert) のメルヒェンは、KHM初版の81番「鍛冶屋と悪魔」(Der Schmied und der Teufel)<sup>44</sup>と逐語的に一致しており (ボルテ／ポリーフカ『注釈書』第Ⅱ巻168頁において復刻)、とどのつまり翻訳とみて間違いない。ドイツ全般において書き留められたこのメルヒェン——KHM82「道楽ハンス」(Der Spielhansel) に関するボルテ／ポリーフカ『注釈書』第Ⅱ巻163頁参照——は、我々の地域で一般的に、「ユーターボークの鍛冶屋」(Schmied von Jüterbog) というテキストにおいて登場する。そんなブランデンブルクに関しては、W・シュヴァルト『マルク＝ブランデンブルクの伝説と古い物語』<sup>45</sup>84頁52番参照のこと。シュレージエンに関しては、ポイケルト『シュレージエン地方のドイツ・メルヒェン』119頁66番参照のこと。ポンメルンに関しては、U・ヤーン『ポンメルンとリュー

<sup>41</sup> J. Šewčik: Bajki a basnički. Jubilejne spisy Serbowki. III. zešiwk (Märchen und Erzählungen. Jubiläumsschriften der Serbowka. Bd. III.). Budyšin-Bautzen 1899. J・シェウチック『メルヒェンと説話—「セルボウカ」記念号』第Ⅲ巻、パウツェン (ブディシン)、1899年。

<sup>42</sup> J. Wenzig: Westslawischer Märchenschatz. Prag 1857. J・ヴェンツィヒ『西スラブのメルヒェン・コレクション』、プラハ、1857年。

<sup>43</sup> Serbske Nowiny (Sorbische Zeitung). Budyšin-Bautzen 1854-1937. 『ソルブ新聞』、パウツェン (ブディシン)、1854-1937年。

<sup>44</sup> 『子供と家庭のメルヒェン集』初版 (1812年) にのみ収録。第2版 (1819年) からは「のんき坊主」(Bruder Lustig) に差し替えられている。

<sup>45</sup> W. Schwartz: Sagen und alte Geschichten der Mark Brandenburg. 3. Aufl. 1895. W・シュヴァ

ゲンの民間伝説』<sup>46</sup>第 I 巻 252 頁 47 番（鍛冶屋のジークフリートと悪魔）を参照のこと。

我々のメルヒェンもまた上記のグループに属しているのだが、我々のメルヒェンには、悪魔との契約の成立という導入部が欠けている。新しくかつオリジナルなのは、ベッドの下に投げ入れられた靴を使った悪だくみや、草地の上のユーモアたっぷりの挿話<sup>エピソード</sup>である。だが、ここでは、魔法の道具が欠けている。収縮形式（Schrumpfform）もまたここでは、いくつかの特徴をなしている。

チェコのバリエーションは全般的に、同様のモチーフ構成と魔法の道具を示している（ティレ『チェコのメルヒェン集』第 I 巻 590 頁）。スロヴァキアのメルヒェンでは、鍛冶屋の他に靴屋も登場する（ポリーフカ『スロヴァキアの民話集』第 III 巻 410 頁）。しかしながら全体的にスロヴァキアのメルヒェンは、チェコの話と大変類似している。ポーランドの話も、イエスとペトルスが歓待の御礼に与える魔法の贈り物や、悪魔との契約で始まるのが通例である（クジジャンフスキー『体系的に配置されたポーランド民話』第 II 巻 38 頁）。

## 使用テキストについて

本テキストは、パウル・ネド（Paul Nedo/ Pawoł Nedo）氏により編集され、バウツェン所在のソルブ民族研究協会論文集第 IV 巻として、ドモヴィナ出版社（Domowina Verlag）から刊行された研究書、『ソルブの民話（民間メルヒェン）—概説と注釈をほどこした体系的文献一覧』（《Sorbische Volksmärchen—Systematische Quellenangabe mit Einführung und Anmerkungen》）である。「メルヒェンテキスト」と題された B 部には、ソ

ルツ『マルク＝ブランデンブルクの伝説と古い物語』（第 3 版）、1895 年。

<sup>46</sup> U. Jahn: Volksmärchen aus Pommern und Rügen. 1. Teil. Norden und Leipzig 1891. U・ヤーン『ボンメルンとリュージェンの民間伝説』第 I 巻、ノルデン、ライプツィヒ、1891 年。

ルプ・メルヒェンが通し番号で86番まで収録されており、実際は、各話に類話加わるため全119話となっている。第1番から29番までは訳出済であり<sup>47</sup>、今回は第30番から33番のメルヒェンテキストおよび注釈の訳出を試みた。<sup>48</sup>

### 【付記】

当該書の翻訳に関しては、アネット・ブレザン氏を介し、ソルプ研究所（ハウツェン所在）のディートリヒ・ショルツェ氏より、1998年6月8日付で許可されていることを付言しておく。

<sup>47</sup> 第1-9番翻訳: 「ソルプの民話1（パウル・ネド編）」（1998年4月、東ドイツ文学会（イルムの会）「東ドイツ文学」第4号、5-44頁）

第10-13番翻訳: 「ソルプの民話2（パウル・ネド編）」（2004年5月、東ドイツ文学会（イルムの会）「東ドイツ文学」第6号、22-40頁）

第14-21番翻訳: 「ソルプの民話3（パウル・ネド編）」（2010年9月、東ドイツ文学会（イルムの会）「東ドイツ文学」第9号、5-29頁）

第21-24番翻訳: 「ソルプの民話4（パウル・ネド編）」（2011年10月、東ドイツ文学会（イルムの会）「東ドイツ文学」第10号、5-33頁）

第25-28番翻訳: 「ソルプの民話5（パウル・ネド編）」（2011年10月、東ドイツ文学会（イルムの会）「東ドイツ文学」第10号、34-52頁）

第29番翻訳: 「クラブアートーソルプの民話（6）ー（パウル・ネド編）」（2018年3月10日、東洋大学文学部紀要「国際文化コミュニケーション研究」創刊号、171-197頁。）

<sup>48</sup> 詳しくは、拙訳「クラブアートーソルプの民話（6）ー（パウル・ネド編）」の訳者解題を参照のこと。（2018年3月10日、東洋大学文学部紀要「国際文化コミュニケーション研究」創刊号、191-197頁。）

